

応用行動分析が授業づくり、学級づくりに貢献できること

Contribution to Classes and Classroom Management of Applied Behavior Analysis

村中智彦・小沼順子・平澤真梨奈・藤原洋樹・道城裕貴・井澤信三・加藤哲文

(上越教育大学) (青森県総合学校教育センター) (新潟豊学校) (矢巾町立矢巾中学校) (神戸学院大学) (兵庫教育大学) (上越教育大学)

Tomohiko Muranaka, Junko Konuma, Marina Hirasawa, Hiroki Fujiwara, Yuki Dojo, Shinzo Isawa, Tetsubumi Kato

(Joetsu University of Education, Aomori Prefectural School Education Center, Niigata Deaf School, Yahaba City Yahaba Junior High School, Kobe Gakuin University, Hyogo University of Teacher Education, Joetsu University of Education)

Key words: classes, classroom, management

【企画趣旨】村中智彦・小沼順子

従来の学校現場において、応用行動分析の普及は、一部の研修を積んだ教師の個人的な関心に支えられていたように思われる。応用行動分析を支える原理のオペラント条件づけや専門用語の難解さ、明快すぎる解釈への学校現場のアレルギーは未だに根強いように思われる。また、学校現場では、実証的で確かなアセスメントや教育成果が必ずしも優先されるわけではない。観察、測定、困難な児童生徒の情緒や内面の育ち、また教師個々の多様な価値観に基づく支援方略の選択が貴重とされる。発達段階に基づくボトムアップ型の支援方略が重視され、課題解決型の応用行動分析のアプローチが馴染まない一面もあった。

しかし、近年では、積極的行動支援(PBS)や学級規模介入に代表されるように、応用行動分析に基づく実践や臨床研究は数多く報告されるようになった。FAIをはじめとしてアセスメントツールやマニュアル本も多く出版されるようになった。こうした応用行動分析の学校現場への急速な広がり背景には、三項随伴性を柱とする学習や行動(生起)の理解や解釈の明快さ、確実な教育成果などがあると考えられるが、一方で、学校の授業や教育活動で展開される児童生徒の学習参加や教師との関わり、仲間同士の育ち合いに見られる教育事象の分析が十分に行われているのかという課題は従来から指摘されている。多様で複雑に交差する独立変数が児童生徒の参加や逸脱行動に影響を与える授業場面において、関数関係がどこまで明らかになっているのか、応用行動分析に基づく成果の検証や裏付け、点検作業は今後の課題であろう。

本シンポジウムでは、特別支援学校や小中学校での授業の中で生じる児童生徒の学習参加、対教師や仲間同士の関わり、「分析」「アセスメント」に焦点を当てた3つの実践を話題提供する。井澤氏(兵庫教育大学)と加藤氏(上越教育大学)の指定討論を踏まえて、応用行動分析が学校での授業や学級経営に貢献できるための視点や課題、大学や学校現場それぞれに求められる研究上の役割について幅広く議論を行いたい。

【話題提供】平澤真梨奈

小集団指導における仲間同士のやりとり行動の分析

知的障害児や自閉症児の小集団指導では、仲間同士のやりとりが成立しにくい。6~8歳の知的障害及び自閉症児5名を対象に、大学の指導室において、特別支援学校や支援学級の朝の会をシミュレートした小集団指導を実施して、仲間同士のやりとり機会を漸次設定した。仲間同士のやりとり行動について、一斉指示及び個別指示機会と、発表及び応答行動の観点から詳細に分析し、どのような

特徴が認められるのか、どんな手続きを適用すれば発表及び応答行動が高まるのかについて検討した。シンポでは、本研究の成果を示すとともに、大学での成果や課題を学校現場での授業づくりにどのように還元し、フィードバックしていくのか、研究機関に求められている役割について提案する。

【話題提供】藤原洋樹

中学校の一斉授業における生徒の逸脱行動の分析

地域の公立A中学校の一斉授業において、生徒の逸脱行動の調査を行った。生徒数600人規模のA中学校は、生徒指導の困難な生徒が多く在籍する教育困難校であった。2学年(5学級)の数学の一斉授業を対象に、時間サンプリング法を用いて逸脱行動を観察、記録した。その結果、観察機会の全てで逸脱行動が認められた生徒は学年全体の4%に過ぎず、一度も逸脱行動が認められなかった生徒は全体の過半数を占めていた。まずは授業に参加している多くの生徒に着目し、学級や集団全体を支える視点が必要であることを学校に提案した。生徒の逸脱行動と授業場面との関連を見ると、「教師の話を聞く」場面において、内職(手紙や落書き、読書など)が増加し、「問題を解く」「黒板をノートに写す」場面の2倍以上になることがわかった。また、机に顔を伏せて寝る逸脱行動を示す生徒では、一度も授業に参加しない傾向が顕著であった。授業展開では、教示を聴く活動と、問題を解く、ノートに写すなどの作業活動を上手く組み合わせることで、生徒の逸脱行動が減り、学習参加が促される可能性が示唆された。

【話題提供】道城裕貴

通常学級において目標設定とセルフモニタリングが児童の聴く行動に及ぼす影響

通常学級において学級全体の目標設定及びフィードバックが小学1年生の児童の聴く行動に及ぼす効果を明らかにすることを目的とした。公立小学校の通常学級、小学1年生の児童37名(男児20名、女児17名)が研究に参加した。標的行動は聴く行動であり、授業開始後10分のon-task行動を観察した。ABAデザインを用い、目標設定とセルフモニタリングによる介入を行った。児童別の分析から、ベースラインの段階で全ての児童にoff-task行動が見られたのではなく、5名の児童に特に多かったことが明らかとなった。ベースラインから介入にかけて、学級全体の聴く行動が増加し、特別な教育的ニーズがある児童のoff-task行動が減少した。つまり、学級づくりあるいは学級支援において、特別な教育的ニーズがある子ども達が在籍する通常学級に対して、学級全体のアセスメントが必要であることが示唆された。